

『シン・ニホン AI×データ時代における日本の再生と人材育成』

安宅 和人 著

食料領域 主任研究官 鈴木 均



『シン・ニホン AI×データ時代における日本の再生と人材育成』
著者／安宅 和人
出版年／2020年
発行所／NewsPicksパブリッシング

著者の安宅和人氏は、東大院（生物化学専攻）修士修了後、マッキンゼー入社、イェール大にて学位取得（Ph.D）、ポスドクを経てマッキンゼーに復帰したという経歴を持ち、現在、ヤフーのCSO、慶応義塾大学SFCにてデータドリブン時代の基礎教養について教えており、他には政府の審議会委員を務めるなどしています。

まず本の前半を見てみると、今の世界がどんどんデータ×AIで物事が進んでいて、これまで不可能であったことが10年後には可能になるというテクノロジーが加速度的に変わってきているのに、我が国は全く追いついていません。日本には、データもない、リソースもない、人材もない、予算も必要どころに配分されていないなど、日本の現状は終わっていると著者は言います。

しかし、まだ日本にはチャンスがあって、データ×AI人材をしっかり育成し、リソースを若者に投資をすれば、なんとかまだ間に合うとのこと。日本のこれまでの歴史を見てみると、何もない状態、ゼロから1を生み出す第1フェーズは経験したことはないが、生まれてきたテクノロジーを使い倒して実用化することやその実用化したものをつなげてエコシステムを構築することは得意なのです。確かに日本は明治維新以降、西洋の文明を導入して国を発展させてきたし、第二次大戦後は高度経済成長を経て、国民総生産は世界第2位までの先進国になりました。それにより、どの国よりも新幹線を作り、計算機、自動車、家電製品といった世界に誇れるものを作り上げました。また、日本にはアニメで培ってきた妄想力という強みがあり、その妄想力によって乗り越えられると言っています。

では、どのような解決策があるのか第5章を見てみると、未来に賭けられるようにする、まさに未来に投資すべきだと言います。日本は過去への御褒美に多額の予算を使いすぎているのか。この過去への恩返しも必要だがほんの少しだけでもいいので、若者と将来の研究開発へ投下するだけで、劇的に世の中が変わるはずだということです。日本は他の先進国に比べて科学技術予算が圧倒的に少なく、20年以上ほぼ横ばいなのです。科学技術予算は投じれば投じずるほど国の競争力につながるものなのですが、日本の国力に見合った研究開発投資がなされていないというのが現実です。ミクロでは選択と集中でよいのだが、マクロではその分野の資本投下を削ればストレートに将来のその分野の国力が低下します。研究開発は、脱「選択と集中」でやるべきなのです。

また、著者は、若者へ投資をすべきだと一貫して主張します。他国の大学に比べて日本の若くて才能のある研究者は日本の大学、研究機関に集まらないです。大学などの高等教育機関の件費は上がっていません。「若い才能と情熱はその時にしかない。その時にリソースを若者に投じなければ、若者の才能と情熱はもう二度と戻ってこないのだ」と強く主張しています。

最後の章では、「風の谷」という運動論を展開しています。日本は人口が都市に集中しており、スマートシティやコンパクトシティなどと言われていますが、このままでは映画の「ブレードランナー」的な都市になってしまいます。目指すべき未来はそういうものではなく、自然と融和でき豊かな空間を持てる未来こそがテクノロジーを駆使して目指すべき未来です。便利な世の中をただ作るだけでなく、これからは、豊かな自然があり魅力的な食文化や誇るべき記憶、伝統を有した地方を見直すべきです。人が自然と融和できる豊かな空間を持てるかどうか、大きな価値を持つ時代が来るのだと主張しています。

日本が抱える構造問題、国としての大事な課題を国民1人1人がしっかり見つめ直すべきだと、この本は言っているように思います。今まさにこの新型コロナウイルスにより、人同士が密にならずに生活、経済活動をするにはどうすべきかというイシュー（ケリつけなきゃいけないこと）が迫られている中、データ×AI時代という大きな変革の波を乗り越えていくに際してのメッセージはより考えさせるものです。

本著の中には、攻殻機動隊、ドラえもん、鉄腕アトム、そして風の谷のナウシカなどが出てきますが、著者はきっとアニメ好きなのでしょう。本のタイトルは、エヴァンゲリオン庵野秀明監督の「シン・ゴジラ」からきたものらしいです。

「この国は、もう一度立ち上げられる！」と信じ、今まさに目の前に来ている大きな変革、ビッグウェーブに乗る準備をしようとして強く感じざるをえなかった、安宅さん風に言うと「ヤバイ」本でした。